

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：32406

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00749

研究課題名(和文) 英語教育における高大連携 - 学校の序列化を超えた価値の創造

研究課題名(英文) High School - University Collaboration in English Education

研究代表者

岡田 圭子 (Okada, Keiko)

獨協大学・経済学部・教授

研究者番号：90316274

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本プロジェクトは、英語に苦手意識を持つ生徒が多い高校を対象とし、高校と大学の教員が協働して、高校生の進路意識と教員の教育力をともに向上させることを目標としてスタートした。研究手法は授業観察、面接、教師との面談等であるが、コロナ禍ではリモートでの打合せが中心となった。研究期間中、生徒は自己肯定感や勉強への意欲が低いという傾向が継続して見られた。しかし、意欲ある教員との協働により、生徒の進路計画や人生に踏み込む英語教育が進展した。中学校までの英語を身につけていない生徒のために60回分の練習問題と解説を作成し、公開した。2つの目標のうち、教員の意識と教育力の向上には一定の成果が認められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は対象を高校生と教員の両方に置いていた。高校生の進路意識を高めるための働きかけについては、(1) コロナ禍により高校生との対話が絶たれたこと、(2) フィールド校のカリキュラムが大きく変更されたこと、の2点を要因として、予想された成果を数値的に示すことはできなかった。しかし、高校教員の意識と教育力を高める働きかけについては、意味ある成果が認められた。高大連携のもとで教育の在り方を話し合う会議は数十回以上に及び、それを通して高校教員が明確に自己の意識と教育力の向上を自覚したと述べていることから意義あるプロジェクトであった。今までとは異なる高大連携のひとつの形を示すことができたと考える。

研究成果の概要(英文)：This project targets a high school where many students have a negative attitude towards English. It started with the goal of enhancing both the career awareness of high school students and the teaching skills of teachers through collaboration between high school and university teachers. The research methods include class observations, interviews, and discussions. During the COVID-19 pandemic, remote meetings became the primary method. Throughout the research period, low self-esteem and motivation towards studying were observed among the students. Nevertheless, through collaboration with motivated teachers, there was progress in English education that got further into the students' career planning. For students who had not mastered English of the junior high school level, 60 practice problems with explanations were created and made available on the Internet. Among the two goals, some success was recognized in improving the awareness and teaching skills of the teachers.

研究分野：英語教育

キーワード：英語教育 高大連携

## 1. 研究開始当初の背景

学習指導要領が改訂され、大学入試に大きな変化がもたらされている昨今、高等学校をめぐる状況は混沌としている。高校生の大半が英語は重要な科目である認識している一方で、半数近くは英語に対して苦手意識を持っている。さらに、自分が大人になった時には英語を使う必要がある世の中になっていると考える高校生が多い反面、実際に自分が英語を使って仕事をするイメージを持っている高校生は少ない。このように、英語学習がどこか「他人事」になってしまっている状況には大きな問題があると言わざるを得ない。

本研究は、英語に苦手意識を持つ高校生が多く在籍する私立高等学校をフィールドとし、その進学コース<sup>1</sup>の生徒（各学年約 60 名）と担当教員 2 名を中心として高大連携の立場から協働を試みるものとしてスタートした。

## 2. 研究の目的

高大の教員が協働し学びあうことによって、高校生が大学や社会生活につながる意欲を高めることのできる英語教育を実施し、教員が高い意識と教育力を持つことができるようになることを目標とする。優秀な高校生を早いうちから大学の現場に招き入れる高大連携とは目的を異にする。

## 3. 研究の方法

学校訪問、授業観察、生徒・教員との話し合い、聞き取り、アンケートなどを中心に実施した。筆者の本務校と高等学校が距離的に離れていることから、訪問は週末中心の限定的なものとならざるを得なかった。2ヶ月に1回の訪問時には、担当教員との打合せ、授業参観などを中心に実施し、訪問できない期間には、インターネットを通してミーティングを行った。

## 4. 研究成果

### (1) 2018-2019 年度

2018 年度は 5 回学校訪問を実施し、アンケート調査を 2 回実施した。この成果はリメディアル教育学会等で発表した。

2019 年度は筆者が本務校から学外研修の機会を与えられたため、月 1 回、1 週間程度の訪問が可能となり、担当教員との話し合い、高校生への聞き取り調査などを進めることができた。この成果はリメディアル教育学会等で発表した。

また、フィールドとする高等学校の他に、何校かの高等学校を訪問する機会も与えられ、比較対象をすることができた。年度末は新型コロナウイルス感染症のため、出張が不可能となり、研究に遅滞が生じた。

### (2) 2020-2021 年度

2020 年度は新型コロナウイルス感染症の拡大により、フィールド校のある地方都市への出張が不可能となり、当該高等学校も学校閉鎖が続くこととなった。そのため、定期的に担当教員とインターネットを介して打ち合わせを行い、プロジェクトを維持した。ミーティングでは、高校生の英語力、学習への意識、また、授業形態や指導法の影響、コロナ禍での高校生への進路指導方法など、多岐にわたり討論を重ねた。このころから、本研究が教員への働きかけにより重要性を見出すようになり、2022 年度へとつながっていったと感じている。

### (3) 2022-2023 年度

2022 年度以降は大きな変化を感じる時期となった。第一に、フィールド校が教育課程を大きく見直し、単位制へと移行したことである。それまでの進学コース、総合コースといった区分もな

くなり、生徒が自分の希望や興味に従って科目を選ぶ形になった。そのため、以前のコース別をとっていたときの学生との比較も難しくなった。さらに、制服の廃止、生徒指導上の縛り（たとえば、染髪の禁止）の緩和、定期試験の廃止などの影響があり、入学してくる生徒層に変化が見られた。中学校で勉強に苦手意識を持っていた生徒の入学が増え、進路意識を明確に持つ生徒がやや減少し、学習意欲全般に関してもやや低下したと担当の教員は観察している。

第二に、学習指導要領の改訂に伴い、探求的な学び、話し合い、などが重視されるようになり、当該の高校でもすべての科目で授業の仕方に変化があった。基本的に講義形式はせず、グループを作って学びあうという姿勢を重視するようになった。その結果、以前のカリキュラムと比較して、コミュニケーションに向かう態度を養う機会は増加したが、英語の基礎力固めより日本語でのディスカッションに時間をとる教員が出てくるなど、探求心をもってはいてもそれを英語で実現するための運用力向上を図る授業が弱体化した印象があった。

2018年度から継続して話し合いを続けてきた2名の教員とこの対策として話し合い、高校生としての学びを下支えするために、高校生用のリメディアル教材が必要だという結論に達した。必要な項目を選び出した後、教材作成に着手し、「単語・表現」、「発音」、「文法」について計60のリメディアル教材・授業マニュアルを作成し、ホームページにて公開し、使用を開始している。

#### **(4) 高校教員との振り返り**

科研の補助期間が終わることに際し、この数年間密接に連絡を取り合い、授業改善に臨んできた2名の教員との振り返りを行った。以下が、その概略である。このプロジェクトの2つの目標の一つである、「教員の意識と指導力の向上」には一定の成果があったと考えられる。以下、項目別に記す。

##### **① 教員が協働して授業改善を行ってきたことの効果について**

教員A：英語教育を通じて生徒の進路や将来まで入り込めた。英語ができるようになれば、選択の幅を広げられると感じることが多くあった。本校の特性上、中学校時代に英語に対する苦手意識を持つ生徒が多いが、大学教員（岡田）と一緒に授業を考えることによって、どうすれば生徒に効果的なアプローチができるか、どのように授業を組み立てればより分かるようになってもらえるのかを考え実践し、効果を実感することができた。

教員B：客観的に、自分の授業を大学教員（岡田）先生に見てもらい、アドバイスを受けた。自分の授業の中で生徒がどのように反応しているのか、改善点や良かった点などについて、「授業内で、こういう言葉かけをした方が生徒は取り組みやすいと思う。この表現は、こういう風に生徒に伝えた方が、生徒にとってプラスになるのではないか」など、具体的な話があり、次の授業に活かすことができた。1つの私立高校で働いていると、他の高校での実践や、大学生の英語学習における躓きなど、なかなか知ることができない。この数年間を通し、大学教員（岡田）からお話を聞く中で、新たに知ることができたことが数多くあり、非常に勉強になった。

##### **② この数年間で物足りないと感じた点**

教員A：研究について物足りなかったわけではなく、途中から本校のシステムが変わってしまったことにより、生徒層が当初とはまた別の形に変化してしまい、生徒に我々の意図をうまく汲み取ってもらえない場面が増えた。コロナの蔓延の直撃を受けたことも非常に残念だった。

教員B：2019年度より、進学コース2・3年生の中の何名かの生徒が大学教員（岡田）と直接お話しする時間があつた。大学教員（岡田）に紹介された大学に進学した生徒もおり、また、大学教員（岡田）と話したことでより英語学習に対する意欲を高めた生徒もいた。しかし、コロナ禍で、大学教員（岡田）の学校訪問や高校生徒の登校機会が限られてしまい、継続的にその取り

組みができなかったことが心残りである。もし、その後も継続して取り組めていたら、その生徒たちの変化を見取ったり、さらに下の学年の生徒たちにも幅を広げて働きかけたりすることができたのでは、と残念に思う。

### ③ 学校のシステムが大きく変わったが、この間の高校生の意識の変化について

教員 A：上を目指し、進学しようという意欲を持つ生徒が少なくなった印象がある。学び合いの効果からか、下位の生徒は減っている印象もあるが、一方で上位の生徒を伸ばさせる授業展開がしにくくなった。そのことも、進学意欲の減退の要因としてあるように思う。しかし海外志向は高まっており、英語を話したい、海外に行きたいと思っている生徒は格段に増えたと感じる。今後は良し悪しはあるかもしれないが、アカデミックというより、コミュニケーション英語が本校では求められるのではないかと感じる。

教員 B：特進・進学コースのように、明確に大学進学を意識して入学してきている生徒の数は減ってきているように感じる。しかし、昨年度から教えている現3年生の中には、大学進学を意識して、高3春休みから個別に英語の相談や質問に来る生徒もいる。また、「英語は中学校の頃から苦手だけど、話せるようになりたい・留学してみたい」という生徒も増えているように感じる。2022年度入学生から単位制に変わり、2年次以降は多くの授業を生徒自身が選択できるようになったため、英語を少しでもできるようになりたいと思って履修している生徒が増えたと感じる。かつては、「カリキュラムに入っているから英語の授業を受けているが、やる気が出ない、やりたくない」という生徒も多かった。

### ④ 高校生のためのリメディアル教材を授業で使用したことについて

教員 A：教科書の内容を補足することもでき、また、新教材の導入で利用することもできた。体系的に文法を教えるためにとっても役立ったと思う。現在も高校1年生の導入で文法プリントを使用して授業をしている。授業本文に入る前に利用することもあれば、復習として利用することもある。

教員 B：高1の授業の導入で使用した。「高校の教科書に入る前に、まず中学校の英文法が不安だ」という生徒が多い本校において、文法事項をまとめて復習したり勉強したりできる教材はありがたい。

### ⑤ 本プロジェクトを通して、自分の教員としての意識にはどのような変化があったか。

教員 A：教育の根幹はやはり教科指導である、という意識が確固たるものになった。教員が気持ち良くなる授業ではなく、生徒がわかるようになる生徒ファーストの授業を心がけ、生徒に少しでも成功体験を持たせられる、「できる」という感覚を味わってもらうことが重要だと思う。そうすることで英語以外の授業でも頑張ろうという気持ちをはぐくむことができ、自己有用感を高めることができるのだとわかった。また、一定期間の中で自身の授業を振り返ることの重要性も感じた。授業を見てもらうことにより、新たな視点や改善点が見えてくるため、自分にとっても非常に重要な数年間となった。今後も、どんな形であれこの繋がりを継続できればと願っている。

教員 B：「高校3年間を通して、生徒たちにどのように・どのくらいの英語力を身につけさせたか?」、「それを実現するために、1年間(または半期)の授業をどう組み立て、1回1回の授業でどのように目標設定してデザインしていくか?」ということ、それまで以上に考えて、授業準備・実践・振り返りを行うようになった。本校に入学してからの3年間を通して、生徒たちが少しでも「英語の力を伸ばせた」、「楽しく英語学習に取り組めた」と思って卒業してもらえるよう、より心がけるようになった。また、2022年度より、学校全体として、これまでの講義型の授業形式ではなく、グループで学ぶ形が主流となってきた。最初は私自身も戸惑いが強かつ

たが、生徒に対する課題の提示の仕方や、学習の取り組ませ方など、今までの授業のやり方を少しずつ見直す機会となった。その中で、生徒の年次や目指す進路、クラス全体の雰囲気や英語力により、あえて講義型で行う授業や、グループ学習を中心とした授業形態にするなど、これまで以上に生徒たちの授業の様子をよく見て、考え工夫しながら授業を行うようにしている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 岡田圭子	4. 巻 8
2. 論文標題 高等学校英語教育における高大教員の連携	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 獨協大学外国語教育研究所紀要	6. 最初と最後の頁 71-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岡田圭子
2. 発表標題 英語学習を自分の手に取り戻すー英語教育における高大連携
3. 学会等名 日本リメディアル教育学会第15回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡田圭子
2. 発表標題 高校生の英語基礎力養成に果たす高大連携の役割
3. 学会等名 日本リメディアル教育学会第11回九州沖縄大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡田圭子
2. 発表標題 英語教育における高大連携の実践
3. 学会等名 日本リメディアル教育学会第10回九州・沖縄支部大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

本プロジェクトにおいて、中学校の英語を身につけずにそのまま高等学校に進学した生徒の振り返り教材を作成し、公開した。以下のURLがそのホームページである。  
<https://www.dokkyo-okada.com/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------